

## シリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡の動物骨埋納

須藤 寛史・西秋 良宏

Animal Bone Deposition within the Neolithic Buildings of Tell Seker al-Aheimar, Syria

Hiroshi SUDO and Yoshihiro NISHIAKI

シリア東北部に位置する新石器時代遺跡、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡のPPNB後期から土器新石器時代初頭（「プレ・プロト・ハッサーナ」）の建築物の壁や基礎部分からたびたび出土する動物骨の性格を検討する。建物に埋められる骨の選択性、場所の規則性、行為の反復性、推測される行動的特徴から、それらの動物骨は建築サイクルに合わせて意図的に埋納されたものであったことを明らかにする。そして、その目的は儀礼的行動であったという仮説を提示し、西アジア新石器時代の儀礼研究は建物への動物骨埋納という儀礼があった可能性も考慮しながら進める必要があることを指摘する。

キーワード：シリア、新石器時代、テル・セクル・アル・アヘイマル、埋納、儀礼

We examined the nature of the large animal bones often discovered within the walls and foundation of buildings from Late PPNB to the early Pottery Neolithic (“Pre Proto-Hassuna”) at Tell Seker al-Aheimar, Northeastern Syria. The selection of types and species of the bones, the regularity of the locations of the buried bones, the occurrence within a specific period and a limited type of buildings, among other patterns, indicate that the animal bones were intentionally deposited according to the cycle of building and re-building activities. This practice should be further discussed in the general context of the Neolithic rituals, for which animals and buildings are known to have played particular roles.

Key-words: Syria, Neolithic period, Tell Seker al-Aheimar, foundation deposit, ritual

はじめに

テル・セクル・アル・アヘイマルは、シリア東北部、ハブール川上流右岸に位置する。新石器時代の居住層を中心としたテル型遺跡である（図1）。東京大学西アジア遺跡

調査団によって2000年から発掘調査が続けられている。これまでの成果で特に重要なのは、北メソポタミア平原西部における農耕民の居住が先土器新石器時代B期にさかのぼることが判明したこと、同地域で最古とされていたプ

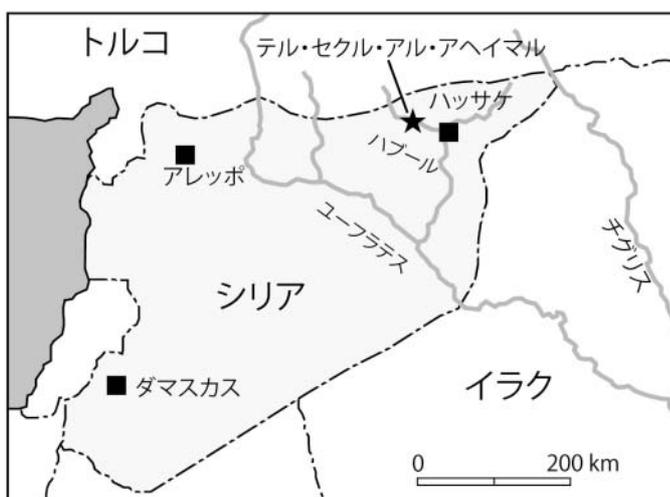


図1 テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡の位置

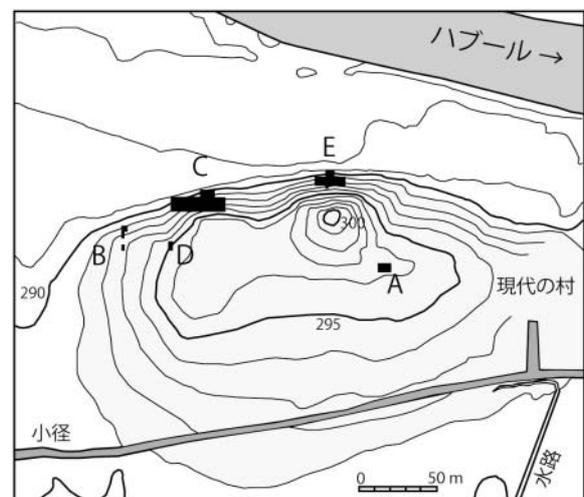


図2 遺跡平面図と発掘区

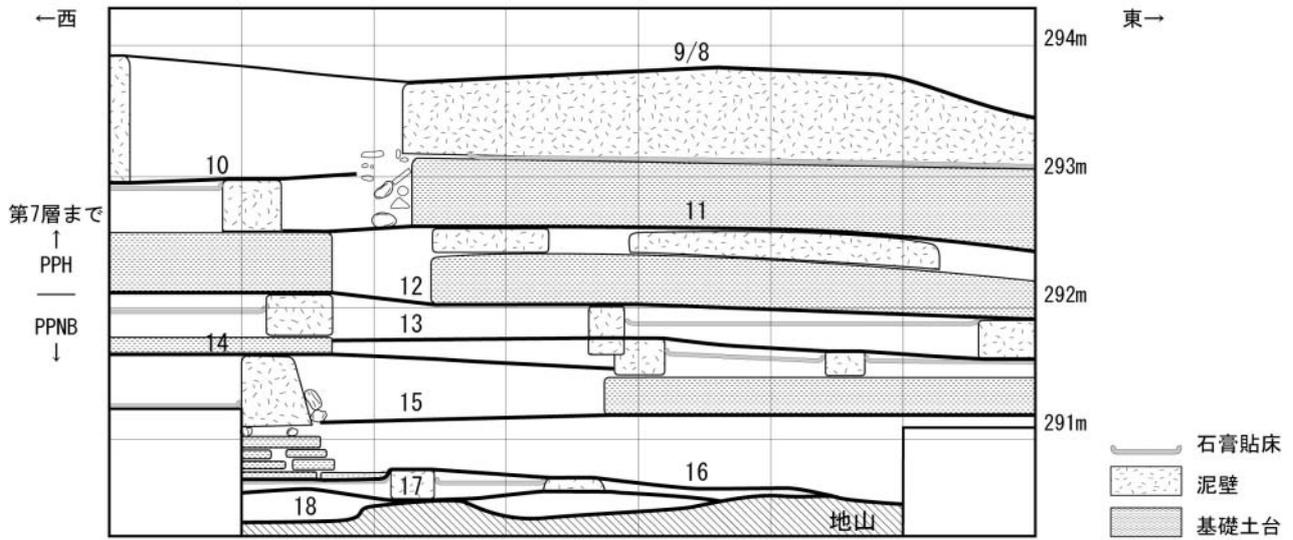


図3 テル・セクル・アル・アヘイマルA区下層部分の堆積概念図（発掘区南面断面を反転）



写真1 テル・セクル・アル・アヘイマルA区下層部分東から

ロト・ハッサーナ期以前の新種の土器文化（「プレ・プロト・ハッサーナ」<sup>11)</sup>）が確認されたことである（Nishiaki and Le Mière 2005, in press）。新石器時代の堆積は先土器新石器時代B期からプロト・ハッサーナ期まで連続的に続くため、同地域における農耕文化の出現期から北メソポタミア平原に集落が拡散するにいたる過程や初期の土器文化の展開などを層位的事実に基づいて詳細に検討できる重要な資料を提供している。

本稿では、セクル・アル・アヘイマル遺跡の数ある発見のうち、新石器時代建築物の壁体や基礎土台（プラットフォーム）中にしばしば検出される大形の動物骨について検討する。出土状況、骨の大きさ、構成などから、これらの動物骨は意図的に埋められたもので、建物の建設にまつわ

る儀礼的活動のひとつであったことを論じる。

#### セクル・アル・アヘイマル遺跡A区の建築遺構と動物骨埋納

セクル・アル・アヘイマルは東西300m、南北180mの範囲に広がり、高さはハブール川氾濫原から11mを計る（図2）。発掘区は5つ設けられている。そのうち2つの発掘区（B区：32m<sup>2</sup>、D区：12m<sup>2</sup>）では試掘的な調査を行うにとどめ、他の3つの調査区（A区：54m<sup>2</sup>、C区：477m<sup>2</sup>、E区：245m<sup>2</sup>）で本格的発掘を実施した。各地区での調査結果を総合すると、セクル・アル・アヘイマル遺跡の新石器時代層序は少なくとも4つの文化期に分けることが出来る。第1期と2期が先土器新石器時代B期、第3期が土器新石器時代初頭（「プレ・プロト・ハッサーナ」）、第4期が土器新石器時代前期（プロト・ハッサーナ）である。第2期が先土器新石器時代B後期に属することは確実であるが、第1期については放射性炭素年代が十分に出そろっていないため同後期であるのか中期までさかのぼるのか定まっていない。細分される可能性もある。

ここで扱う動物骨埋納は、A区の第2期末から第3期初頭、すなわち先土器～土器新石器時代移行期の建築物に集中する。A区はテルの北東平坦部に設けた東西9m、南北6mの小さな発掘区である。2005年の発掘で地表下約7mの地点で地山に到達し、その堆積は18の層位に分けられた（図3、写真1）。最上層の第1～3層は銅石器時代で第4層から下層が新石器時代となり、第6層までが第4期（プロト・ハッサーナ）、第7～12層が第3期（「プレ・プロト・ハッサーナ」）、そして第13～18層が第2期（先土

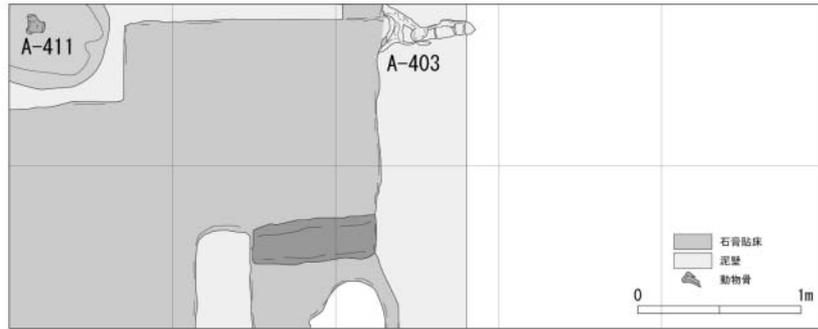


図4 テル・セクル・アル・アハイマル第17層

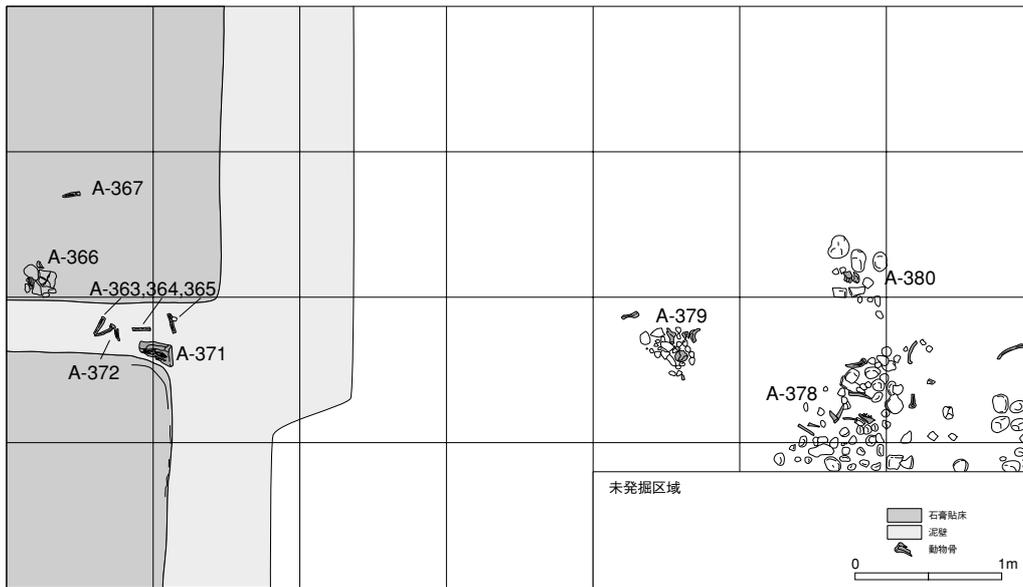


図5 テル・セクル・アル・アハイマル第16層

器新石器時代B後期)となる。A区で最初に建築物が確認されるのは第17層であるが、以降第10層まで、ほぼ同じ配置、建築方法、建築素材で連続的に矩形の建築物の建て替えが繰り返された。動物骨が検出されたのは第16～14、12層の建築遺構である。以下、第17層以降の建築遺構と動物骨の出土状況について説明する。

#### 1. 第17層(図4)

A区で最初に泥壁の建築物が検出される層位である。地山上に10～20cmほど暗褐色土が堆積し(第18層)、その上に建設された。地表面から直接泥壁が積み上げられていた。のちの第16層以降に見られるような基礎土台や基礎石列は施工されていなかった。

この層の発掘は南北2m、東西5mと狭い範囲にとどめたため、発掘区西半に建物の一室が部分的に検出されただけであるが、内部施設がよく残存していた。北東隅は北に向かう通路となっており、その部分の東壁中に石膏プラス

ターが施された排水口(A-403)が設けられていた。壁内側の開口部に径10cmほどの円礫が詰まっていた。現代の農村の家屋に見られるように、ネズミなどの小動物やサソリの侵入を防ぐためのものだろうか。北西隅にはかまど(A-411)が設けられていた。底には動物の角の基部が検出された。残存長は13cmほどである。かまどの覆土は炭や灰、赤く焼けた焦土を含む暗褐色土で、遺物は細かい石器や獣骨片ばかりであった。また部屋の石膏プラスターの床面上からも遺物はほとんど出土しないので、これだけ大きな動物遺存体がかまど底部で検出されたのは唐突な印象を受ける。しかし意図的に置かれたと判断できる証拠はない。南部には部屋の中央付近で止まる壁があり、その東に敷居が盛り上げられ、表面は石膏プラスターで仕上げられていた<sup>2)</sup>。

壁体は高さ10cmほどで第16層の建物の建設の際に削平されていた。わずかに残った壁や床下からは、後述するような意図的に埋められたと思われる動物骨は出土しな

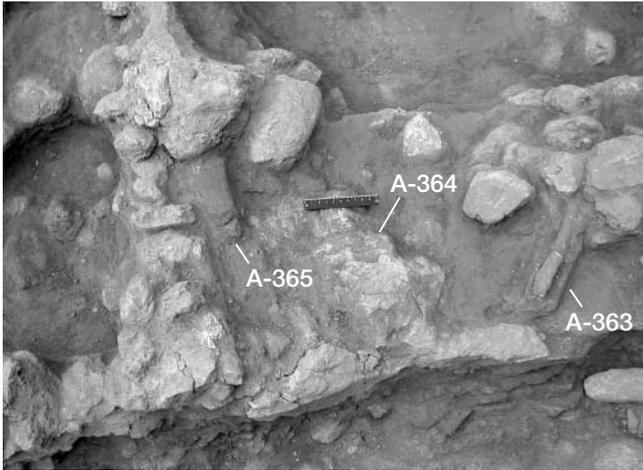


写真2 第16層西建物の動物骨(A-363-365)検出状況北から

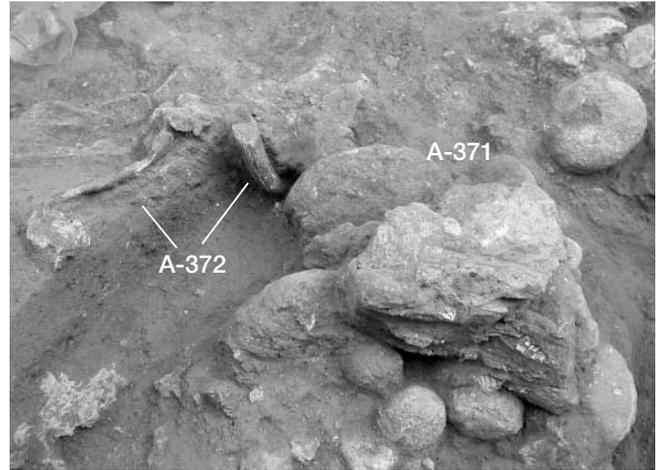


写真3 第16層西建物の動物骨(A-371、372)検出状況南から

った。また第17層の建物はのちの第16層から第10層までの建物と、プラン、位置が大きく異なることも注意したい。この点についてはのちに再度触れる。

## 2. 第16層(図5)

第17層の建物を床上10cmほどのところで整地し、発掘区西端に南北方向に伸びる泥壁の建物が建設された。中央の壁によって南北二部屋に区画される。第17層の建物の上に建っているが、場所、プランとも大きく異なる。一方、この建物の配置は後の第10層まで連続と維持される。この東側は外部空間で、動物骨を多く含む集石遺構(A-378~380)が確認された。

西側の建物は、厚さ8cmほどの泥板を4段積み上げた基礎土台の上に泥壁を立ち上げている。基礎土台の上には礫を全面的に雑に敷き詰めてあり、その上に泥壁と石膏プラスターによる貼床が構築される。この礫群の中、特に中央の仕切り壁部分にガゼルの角が4本(A-363~365、372)、と動物の下顎骨が埋め込まれた石膏製品(A-371)が集中していた(写真2、3)。また床下の礫群の中にも大形の動物骨片が2点検出された(A-366、A-367)。うち1点(A-367)はガゼルの角であった。

下顎骨が埋め込まれた石膏製品は、セクル・アル・アヘイマル遺跡ではこれまで同様の遺物が、先土器新石器時代層から土器新石器時代の初頭にかけて小さな断片も含めて10点以上出土している。石膏で作られた長さ20~30cm、厚さ4~5cmほどの鏡餅状の塊にヒツジ・ヤギなどの下顎骨を複数上向きに並べて埋め込んだものである(Nishiaki 2002: Fig. 4)。いずれも下面が平らに整形されており、本来は平置きにされていたと考えられる。ただそのような置物としての使用を示す出土状況はこれまで確認されていない。ここでは壁の基礎石列の一部として使用され

ていた。本例は一部破損しているが、長さ30cmを越える大きなものであり、偶然に混入したとは考えにくい。またははじめから建築材として製作されたとも思えない。何らかの使用ののち、建築材として再利用されたと見てよいだろう。壁の屈曲部に位置することも示唆的である。

そのほかの角や骨についても、泥壁中に検出されたのならば建築材として採掘された粘土に含まれていたという可能性もある。しかしこの場合、壁や床の基礎石群の中にあること、ガゼルの角がほとんどであることから、これらの角は下顎骨を埋め込んだ石膏製品とともに意図的にこの場所に集められた可能性が高いと考えられる。

## 3. 第15層(図6)

第15層では、第16層西端の建物が引き続き使用され、発掘区南東部に泥壁で構築された矩形建築物が加わる。両建築物の間は外部空間となり、長円形の穴窯が2基掘り込まれていた。

南東部の建物は西側の建物とまったく同じ構築方法をとっている。まず大きな泥板(最大約100×30×8cm)をここでは3段組み上げて基礎土台を建てる(写真4)。この基礎土台は全面的に泥板で構築されているのではなく、中央部には南北60cm、東西250cmの矩形の空間が空いており、そこには礫や石膏プラスター製品の破片を大量に含む土が充填されていた。その基礎土台の上に、ここでは壁部分にだけ礫を雑に並べた基礎を構築し、その上に泥壁、石膏プラスター床を施工している。中央部には南北両側から壁が延び、30cmほどの出入り口を開けて部屋が区画されている。

この新たに増築された南東建物では意図的に埋められたと思われる動物骨が2例確認された。1つは部屋の北西隅の壁体の中である(A-283)。骨の周囲を礫で囲っており、

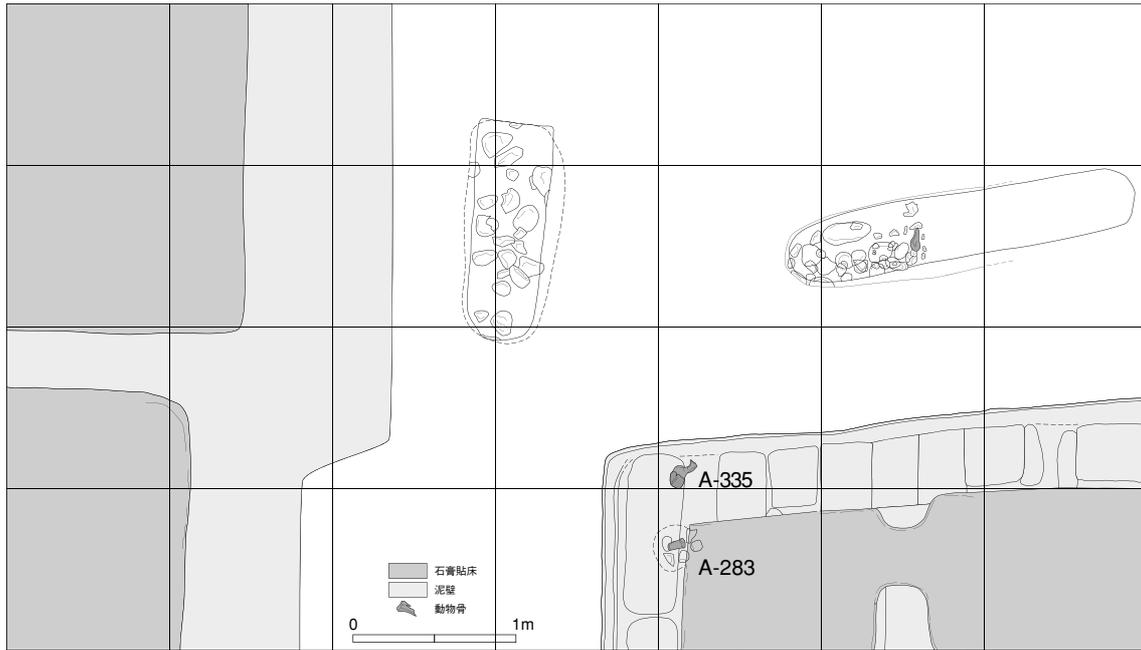


図6 テル・セクル・アル・アハイマル第15層



写真4 第15層南東建物基礎土台 北から

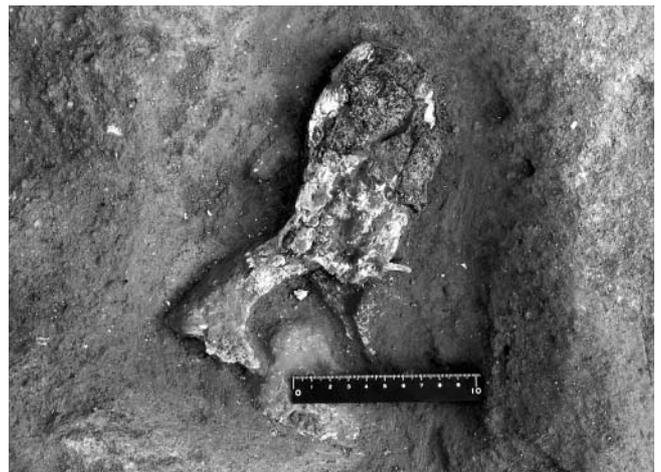


写真5 第15層南東建物の動物骨 (A-335) 検出状況 北から

この辺りの石膏プラスター床が破損していた。上層からの掘り込みは確認されなかった。また後述する第12層のA5-155の例と位置や埋め方が酷似するので、本例はこの南東建物の部屋の北西隅を意識して埋められたことは疑いが無い。この部屋を使用していたある時点で、壁に穴を開け（そのときに床も破壊し）、磔を積み、骨を納め、また埋め戻すという一連の行為がなされたことが推定できる。第12層の例を考慮すると、発掘時には確認されなかったが、実際は骨を埋めたあとに床を貼りなおした可能性は高い。

もう一例は基礎土台北西部、泥板と泥板の隙間に検出したものである (A-335、写真5)。雄ヒツジの角で、端部に

はピチュメンが塗られていた。掘り込みや石囲いは見られなかった。しかし長さ20cmを超える大きなものであり、ピチュメンによる加工も施されていることから偶然に埋まったものとは考えにくい。泥板で建物の基礎土台を構築する際に、泥板の隙間に意図的に横置したと考えられる。

#### 4. 第14層 (図7、写真6)

第14層では、西側の建物が下層、第15層とほぼ同じ場所、範囲で新たに建て直される。部屋を南北に区画する壁が北へずれ、西端中央部に南北方向の短い (約1.3m) 壁が立てられる<sup>3)</sup>。ここでも下層の建物の上に基礎土台を粘土で積み上げ、壁部分に基礎石を敷いている。石膏プラス

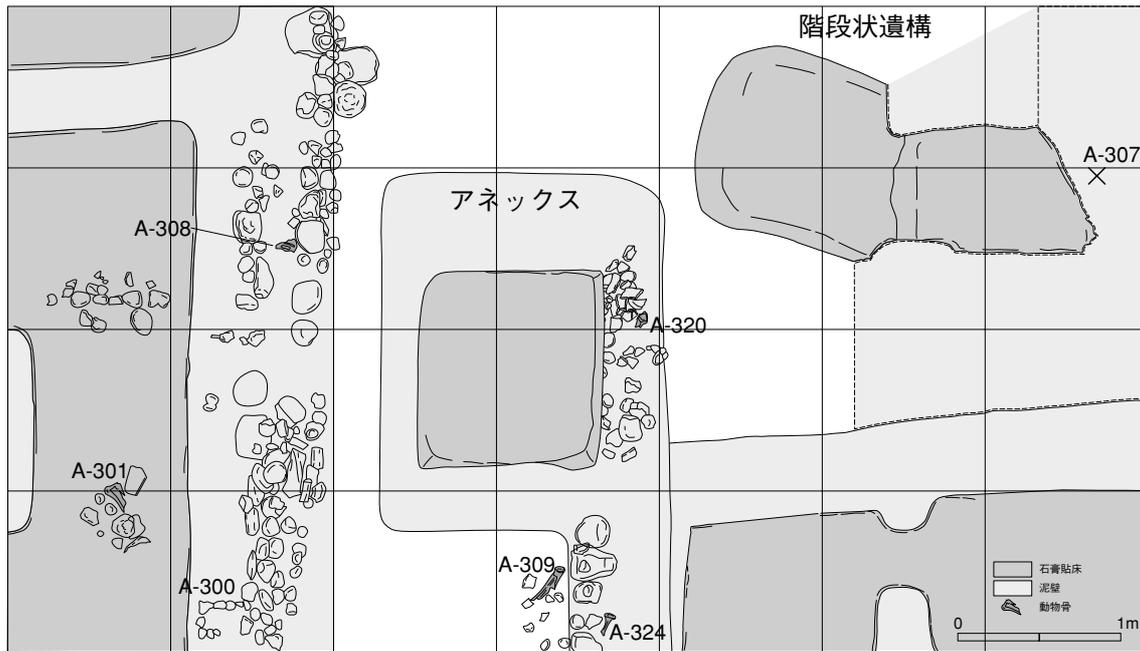


図7 テル・セクル・アル・アヘイマル第14層



写真6 第14層北東階段状遺構と南東建物 北西から

ター床の下にも部分的に集石が確認された。一方南東部の建物には、その北西角に方形のアネックスが付け足された。ここには粘土による基礎土台は施工されなかったが、東壁部分にだけ粗雑な基礎石が敷かれている。さらに発掘区北東部には石膏プラスターを張った階段状の施設が設けられている。

第14層で建て替えられた西側の建物で、第16層の例と同様の、ヒツジもしくはヤギの下顎骨を埋め込んだ石膏製品が建物東壁の基礎の一部として利用されていた(A-308)。また同じ壁の南部では小礫を矩形に並べた中央に動物骨が横置されていた(A-300)。部屋の石膏プラスター床の下にも礫に囲われた動物骨が確認された(A-301)。

南東建物のアネックス東壁基礎石中の例(A-320)は、骨の周囲を囲うように礫が集中している。この状況は第15層の南東建物東壁中のA-283や後述の第12層A5-155と類似している。いずれにせよ建物の基礎施工時に、骨を納める施設を設けたことは確かであろう<sup>4)</sup>。

さらに北東部階段状遺構<sup>5)</sup>の構築土中にも大形の動物骨を検出した(A-307)。石造構築物は伴わないが、骨の大きさと水平に置かれていることから意図的に埋められたものと思われる。

#### 5. 第13層(図8)

第13層は南東建物が若干プランを変えて下層とほぼ同じ場所に建て替えられた。ここでは基礎を構築せず、下層の建物の床の上に直接新たな壁が積み上げられていた。西側建物、アネックスはそのまま使用された。発掘区北東部の階段状施設は同じ場所で改築され、東西に範囲を広げた。またアネックス東壁に平行して南へ伸びる石膏プラスター床が付け加えられた。新たに加わった床は、北東の階段状遺構より10cmほど低く設置され、両者の境目には、蒲鉾を2つ並列させたような2連ドームの敷居で連結されていた。これは粘土を硬くつき固めた上に石膏プラスターを塗って仕上げられていた。

この段階で新たに増改築された施設には特殊な出土状況を示す動物骨は検出されなかった。

#### 6. 第12層(図9)

第12層では西側および南東の建築物が同時に建て替え

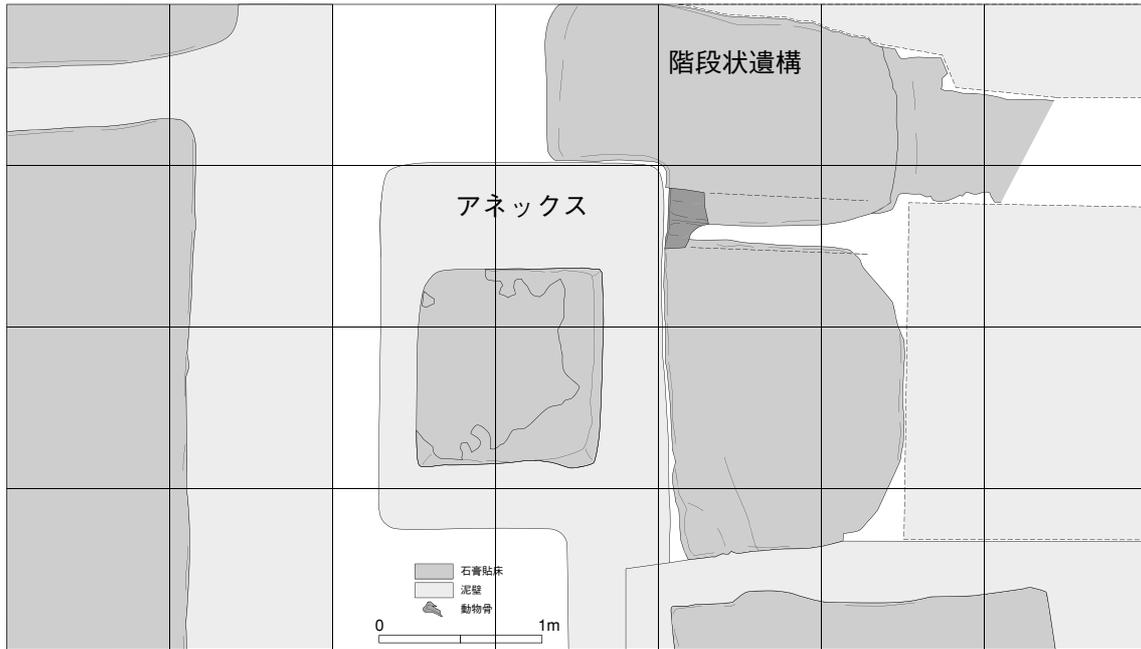


図8 テル・セクル・アル・アハイマル第13層

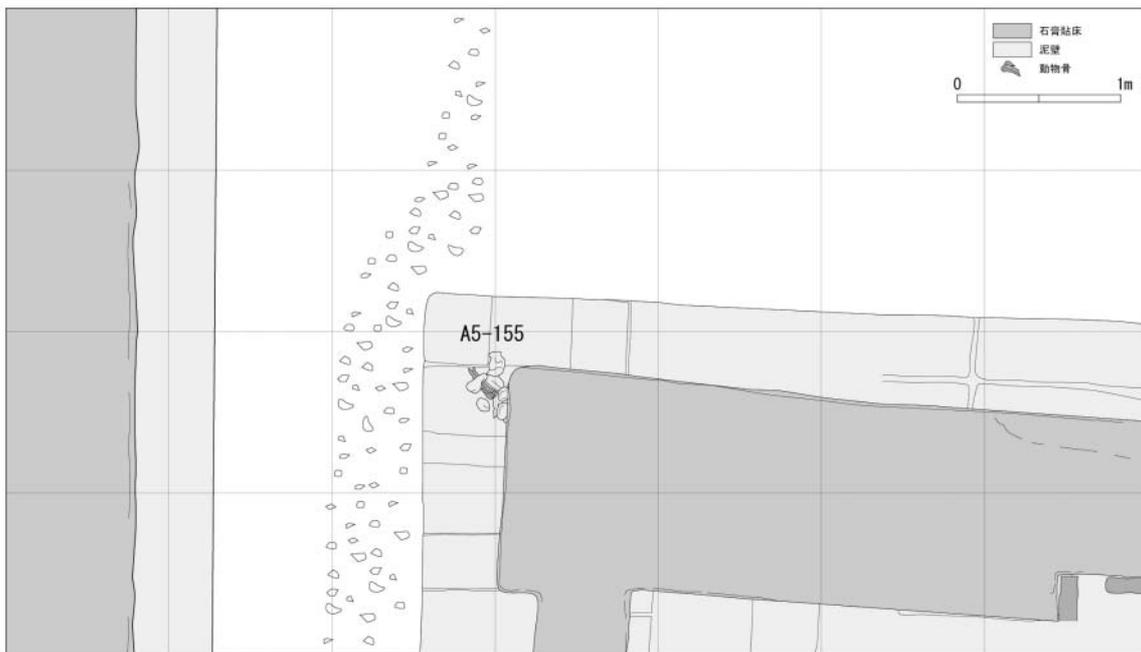


図9 テル・セクル・アル・アハイマル第12層

られるが、下層の建物とまったく同じ場所に同様の構築方法で建設されている。いずれも下層の建物をほぼ床面直上まで削平し、厚い基礎土台を設け、その上に壁、床を施工している。

西側の建物は発掘区の範囲では仕切り壁はなかった。床下の基礎土台は、南北端、そしておそらく東辺も粘土で約60cmの高さに積み上げ、中央部は大量の礫や石膏プラスター床の破片で埋め立てられていた。この西建物からは特

殊な出土状況を示す動物骨は検出されなかった。

南東建物は第15層の南東建物と同じように、大きな泥板を3、4段組み上げた基礎土台を構築している。中央部にはやはり大量の礫や石膏プラスター床の破片が充填されていた。部屋の南西隅には40cmほどの出入り口が開けられている。また南東隅には幅10cmほどの細い泥壁により、小さなカマドを構築していた。

この南東建物の壁、北西隅に礫で囲われた大形の動物骨



図10 テル・セクル・アル・アヘイマル第11層



写真7 第12層南東建物の動物骨 (A5-155) 検出状況  
北から



写真8 第11層南東建物の湯下面遺物出土状況 南から

が発見された (A5-155、写真7)。この部屋の石膏プラスター床は少なくとも3回の貼替えが確認されている。最上部の床は無傷であるが、その下2枚の床は、この動物骨埋納施設により破壊されていた。つまり、最後の石膏プラスター床を施工する前に、壁および床の一部を破壊し、礫を積み上げ、その中に骨を納めたことが分かる。場所、構築方法とも第15層のA-283例に酷似する。

#### 7. 第11層、第10層 (図10)

第11層では西側の建物は継続して利用され、南東建物が建て替えられる。発掘区北東部はこの南東建物の北辺に沿って石膏プラスター床が3面隣接して設けられる。第

10層では南東建物は継続し、西建物が建て替えられる<sup>6)</sup>。北東部は上述の石膏プラスター面は使用されず、長円形の穴窯や、帯状の粗雑な石膏プラスター面が設置された。

南東建物についてももう少し詳しく説明しよう。まず下層の第12層南東建物は、建て替えのため床上約20cmのところを削平され、ここでも泥板による基礎土台が約60cmの高さで積み上げられた。やはり中央部には礫や石膏プラスター床の破片を多く含む土が充填されていた。基礎土台の上には、北壁と西壁の部分にこれまでより大きな礫や長さ60cmを超える巨大な石膏プラスター製の板を用いた基礎を構築していた<sup>7)</sup>。

建物内部は中央の仕切り壁により約50cmの通路を空け

て東西二部屋に分けられていた。西側の部屋は南北約 2m あるが、東側の部屋は南北約 1.3m である。隣接する部屋の大きさが異なるのは第 16 層から第 15 層にかけての西側建物と似る。

この南東建物の北辺に沿って、石膏プラスター床が 3 枚、階段状に設置される。それぞれの箇所ですら 3 回から 5 回にわたり少しずつ形・範囲を変えながら張替えを繰り返している。また相互に同一の高さにある面がないことから、第 14 層から第 13 層にかけて同じ場所に見られた階段状遺構と同様の性質を持つものと思われる<sup>8)</sup>。

この建物で注目されるのは、床面からたくさんの大型の白色容器、石製容器、土器片、石製パレットや磨製石器が原位置を保って出土したことである（写真 8）。これまでの建物もこの後の建物でも、セクル・アル・アヘイマル遺跡の建築物の部屋の中、特に床面からは出土遺物が非常に乏しい。もっとも第 11 層以前の建物はいずれも、上層の建物建設の際に床面すれすれまで削平されたことが影響しているのかもしれない。A 区では第 10 層で泥壁による建築物の構築がいったん途絶える。そのためか第 11 層から第 10 層の南東・西建物の壁は最大 70cm 残存していた。このことも部屋内部に遺物が豊富に残された原因として挙げられよう。

さて、このように遺存状態の良好であった第 11 層、第 10 層の建築遺構であるが、基礎土台、および壁、床下のいずれからも、意図的な埋納と思われる動物骨は確認されなかった。ただし、建設プラン、施工方法は下層の建物とまったく同じである。

この後、第 9 層では一旦 A 区における泥壁の建物の建設が途切れ、第 8 層以降で再び泥壁の建物が断片的に確認される。しかし場所、構築法、プランともそれまでとはまったく異なるものであった。また、意図的に埋められたと思われる動物骨は確認されなかった。すなわち、動物骨埋納は土器新石器時代の初頭、「プレ・プロト・ハッスーナ」期の後半以降には全く行われていなかったことになる。

#### セクル・アル・アヘイマル動物骨埋納の特徴

以上、新石器時代の建築物とその壁や基礎から検出される動物骨の様相を概観した。サイズや出土状況に一定のパターンが認められることから、意図的な埋納行為と見てよいであろう。そのことをより明確にし、性格を探るため、これら動物骨の埋納行為の特徴について、以下 5 つの点から整理してみよう。

#### 1. 動物の種類と部位

埋納された動物の種類は、現在動物考古学の専門家が同定作業を行っているところである。したがって、種や部位

の選択性の詳細については機会を改めて論じたい。いまのところ筆者らが指摘できるのは、長さ 20cm を超えるような大形の骨が多いこと、雄のガゼルの角が目立つことである。すなわち、骨の選択に何らかの基準が働いていることは確実に考える。

#### 2. 肉つき骨か

これらの骨は埋められたときどのような状態であったのだろうか。肉がついたまま埋められたのか、骨だけが対象となったのか。この点は骨に残ったカット・マークの有無が手がかりになるであろうが、現段階では調査未了である。だが、少なくとも現場では関節が連続する骨がみあたらなかったことから、筆者らは「骨」の埋納であったとの印象を強くもっている。

そもそも軟部をもたない角が頻繁に選ばれていること、骨の一部が直接ビチュメンで覆われていた例があることからみても、新石器時代人が動物の骨そのものに対して特別な関心をはらっていたことは確実である。また、当遺跡では動物下顎骨を石膏塊に埋め込んだ謎の製品がいくつもみつかっているが（Nishiaki 2002: Fig. 4）、その場合は肉を削がれた後の骨が利用されていたことが明かである。こうした状況証拠からすると、本稿でいう埋納骨も肉付きではなかった可能性が高いのではないか。では、埋納する「骨」の調達はどうにされたのであろうか。先土器新石器時代の頭骨儀礼のように、遺体を埋葬して肉が腐敗する頃に掘り起こした、とは考えにくい。肉を消費した後に埋納用として骨の一部が回収されたと考えるのが自然のように思われる。そして次項で述べるように、多くの場合建物の建築、建て替え、床の張替えにあわせて埋納行為がなされたことをあわせて考えると、肉の消費、建物の建設、骨の選別・埋納が一連の行為として行われた可能性も浮上しよう。

#### 3. 埋納のタイミングと場所

これらの骨は建物建設のどの段階で埋められたのだろうか。多くの例は壁や床下の基礎集石に見られる。したがって、基礎土台を構築した後、壁や床を施工する最初の段階でこの行為が成されたことが分かる。同時に、第 15 層の南東建物で検出された A-283 や第 12 層南東建物の A5-155 の例では、石膏プラスター床が破損していることから、建物の使用中に、壁や床を一部掘り込んで埋められたこともあった。とはいえ、第 12 層南東建物の場合はその後に石膏プラスター床が張り替えられていることから、床の張替えも動物骨を建物に埋め込むタイミングとして意識されていたと考えられる。つまり、建物の新築、改築、床の張替えといった節目のタイミングでこれらの行為が行われたと

いえる。そして建物の基礎、床下、壁のコーナー部分など、特定の場所に繰り返し行われることも注目すべき点である。

#### 4. 建築物の性質

次に動物骨の埋納が行われた建物の性質について考えてみたい。A区の第16層から第10層まで、西側の建物と南東部の建物は同じ場所、同じ工法で連続的に建て替えを繰り返している。非常に厚い基礎土台や、建物の周囲を囲む石膏プラスター張りの階段状施設、建物の角に張り出したアネックスなど、単なる日常的な住居とは考えにくい様相を示す。

先土器新石器時代後期末から土器新石器時代初頭の建物群はA区だけでなく、その前後の時期を含めてC区やE区でも発掘されている。しかし、それらの区では、はるかに広い面積が調査されているにもかかわらず、上記のような特徴をもつ建物はほとんどみあたらない。基礎土台をもたない一般的な矩形泥壁建築が主体である。そして、動物骨埋納もわずかしこ発見されていないのである。そのわずかな例とはC区の先土器新石器時代後期末の建物からの出土であり、それは、A区でみられたようなアネックスをもつ「異形建物」(西秋2007)であった。このような状況からすると、集落中央よりに位置し独特な建物が継続して建造されたA区一帯は、集落北縁にあたるC・E区とは異なった機能をもっていた可能性がある。この点はほかの出土遺物の分析と併せ、今後、総合的に検討しなければならない。

#### 5. 建築物の変遷と動物骨埋納

最後にA区における建築の変遷と動物骨埋納との関係を整理しておこう。A区で泥壁による建築物が最初に確認されるのは第17層である。しかし、第16層以降の建築物とは建物の場所、形態が大きく異なる。第16層の建築物はこの第17層の建物を削平して構築しているので、時間的な差は大きくはなかったと思われる。しかし、建設計画あるいは建設目的に何らかの変化があったとみられる。このような変化は第10～8層間にも見られる。第9層では、一度この地区での建設がとまり、屋外空間として利用された。そして再度第8層で泥壁の建物が建設されるのだが、第10層までとはまったく異なる建物の配置になる。つまり第16層から第10層は、常に下層の建設原理に倣った連続的な建て替えの集積であったといえる。動物骨埋納がこの一連の建築物に限定されることは両者の性質を探るうえで注目すべき点であろう。

次に時期区分の点から整理してみよう。A区の層序は第13層と第12層を境に先土器新石器時代B期と土器新石器

時代に分けられる。しかし建築物を見る限り、両期の間で、変化はまったく無いといってよい。動物骨埋納は第16層に始まり、第12層の南東建物を最後に行われなくなる。第12層はA区で「プレ・プロト・ハッスーナ」と呼んでいる土器が出土する最初の層位である。つまり、「プレ・プロト・ハッスーナ」の初頭まで動物骨埋納が行われたということである。建物の特徴や建設計画は第10層まで同じでありながら、動物骨埋納という特殊な行為が第11層以降見られないのである。第16層から第10層は、較正放射性炭素年代によれば紀元前7千年紀初頭の200年間ほど、10世代弱と見積もられる期間に相当する(Nishiaki and Le Mière in press)。この間、建築に関する社会的な規範、記憶(cf. Hodder and Cessford 2004: 36)を保持する集団がここに住み続けたことは確実であるが、動物骨埋納という習慣だけ放棄したのだろうか。あるいは単に発掘区がせまいことによるのか。この点は将来の発掘で明らかにできるだろう。

以上から、セクル・アル・アヘイマル遺跡の動物骨埋納の特徴は、次の諸点にまとめられる。

- ・角、あるいは大きな骨が選ばれている
- ・肉がそぎ落とされた「骨」が対象となっているらしい
- ・加工を施された骨が使用されている例がある
- ・建築、改築サイクルの節目で行われている
- ・建物の壁、特にそのコーナー部分、床下など、決まった場所に繰り返し行われる
- ・特殊な性質を持つ建物に限定されていた可能性がある
- ・先土器新石器時代末から土器新石器時代の初頭にかけて行われている

最後の点についての考察は発掘調査が継続中であるので今後の議論を待つとして、それ以外の点から現時点で結論できるのは、ここで論じた大形の動物骨は、意図的に埋められたものだということである。では、その意図とは何か。骨を壁や基礎に埋めたところで、建物の強度を増すといった物理的効果は全く期待できない。筆者らは、その目的は儀礼的行動ではなかったかと推察する。

#### 今後に向けて

西アジアの新石器時代遺跡では、儀礼活動に動物が関係する例が少なくない。饗宴の場での食料としての利用を除けば、既知の事例は、偶像としての利用、および副葬品としての利用、そして建築装飾としての利用に大別できる。動物の偶像製作は既に終末期旧石器時代のナトゥーフアン期に一般化するが、顕著な発達を遂げるのは新石器時代である。特にPPNA 終わり頃から前期PPNB 期にはシリア北部のジェルフ・エル・アハマル(Jerf el-Ahmar)や

トルコ南東部ギョベクリ・テペ (Göbekli Tepe) などで見られるような巨大な石像物さえ製作される (Stordeur and Abbes 2002; Schmidt 2005)。PPNB 後期から土器新石器時代にかけては小形土偶の製作が普遍化する。造形対象も前期 PPNB 期までのネコ科動物、サソリ、猛禽類などの特殊動物から、ヒツジ・ヤギなど家畜動物に変化することも知られている。副葬品としての利用はイスラエルの PPNB 後期遺跡、クファル・ハホレシュ (Kfar HaHoresh) や西シリア土器新石器時代のテル・アイン・エル・ケルク (Tell 'Ain el-Kerkh) などの事例が知られている (Goring-Morris 2000; Tsuneki 2002)。また、建築装飾としての利用には、トルコの土器新石器時代遺跡チャタル・ホユック (Chatal Höyük)、イランの PPNB 後期遺跡ガンジ・ダレ (Ganj Dareh) D 層などで報じられている壁体へのウシやヒツジの頭蓋骨のはめ込みがあげられよう (Mellaart 1967; Smith 1972)。

テル・セクル・アル・アヘイマルでの所見を通して筆者らが指摘したいのは、これらに加え、西アジア新石器時代には動物骨埋納という儀礼形態もあったのではないかとことである。建築物の壁体、基礎などから動物骨が出土したという報告は、断片的ながら他遺跡にもある。北シリアのジャーデ・ムガーラ (Dja'de Mughara) では、PPNB 前期の「死者の家 (Maison des Morts)」の近くのベンチ遺構の下からウシの頭蓋骨が発見されたという報告がある (Cocqueugniot 2000)。また、同じく北シリアのテル・アブ・フレイラ (Tell Abu Hureyra) の報告には、PPNB 中期の建物の壁からオーロックスの角が検出されたという記述がある (Moore et al. 2000: 218)。また、ヨルダンの PPNB 後期遺跡、バジャ (Ba'ja) とバスタ (Basta) では、壁の中、床、床下、壁と壁の間などに、斧形打製石器や石皿・磨石、石製容器の埋納、幼児埋葬のほか、動物骨の集積がいくつも確認されているという (Gebel 2002)。いまだパタン化できるほどの報告例はないが、一つには建物を丁寧に解体調査する発掘が現在あまり実施されていないことによるのかも知れない (Gebel 2002)。今回のテル・セクル・アル・アヘイマル遺跡での経験に照らし、筆者らは動物骨埋納は実はかなり一般的なものであったのではないかと推察する。

建物への埋納行為をめぐっては後世の時代の事例については既に議論がある。エリスは古代メソポタミアにおけるそうした行為を「建造物基礎埋納 foundation deposits」と呼び、その行為の動機として神聖化 (sanctification)、保護 (protection)、記念 (commemoration)、入念 (elaboration) を挙げた (Ellis 1968: 165-168)。また、埋納の対象となったモノについて、埋められた時点でそのサイクルが終わるのではなく、そこからモノのライフ・サイク

ルの新たな段階に入るのだという見方 (Herva 2005: 222-223) も提出されている。一方、新石器時代の埋納行為についての議論はまだ緒についたばかりである。従来もっぱら議論されてきたのは PPNB 期に一般化した床下への人体・頭骨埋納であり、これには死者がもつ超自然的な力を生者の世界に取り込むための儀礼的行為であったとの解釈がある (Verhoeven 2002a, b)。動物骨埋納が確かに儀礼行動であったとしたら、それも同じように解釈してよいのだろうか。本稿は問題提起にとどまるものだが、今後、類例の蓄積を待って、民族誌 (Wilson 1999: 299-300) の記載も参考にしながら解釈を深めていきたい。

謝辞 マーク・フェルファーフェン博士には興味深い関連文献をご教示いただいた。リオネル・グリション博士にはセクル・アル・アヘイマル遺跡の動物骨データを作業途中にもかかわらず提供いただいた。久米正吾氏にはセクル・アル・アヘイマルの石膏製品についてご教授いただいた。末筆ではあるが、記して謝意を表する。

本研究は平成 16～18 年度日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)、平成 17～18 年度文部科学省科学研究費特定領域研究 (計画研究) (以上、代表：西秋良宏) による成果の一部である。

#### 註

- 1) 筆者らはこの新種の土器文化を便宜的にプレ・プロト・ハッサーナと呼んでいる。これより下層の先土器新石器時代 B 文化と後のプロト・ハッサーナ文化とをつなぐ物質文化として注目している。
- 2) この部屋は少なくとも 4 回、石膏床の張替えが行われており、内部施設もあわせて変更されていた。ここで示した図は 2 枚目の床の状態である。
- 3) 部屋の中央に単独で立てられる短い壁は、C 区の先土器新石器時代層の建物に見られる (Nishiaki 2002: Fig. 2; Nishiaki and Le Mièrè 2005: Fig. 3)。A 区第 14 層の場合、何度か床の張替えが行われており、最終的にはこの壁は根元近くまで除去され、最後の石膏プラスター床の下に隠されていた。
- 4) 同じ壁の南部は伏せて置かれた大形の石皿を含む石列を壁の基礎としており、基礎の両側から比較的大きな動物骨が見つかった (A-309, A-324)。しかし、壁の西にある A-309 は泥壁の範囲の外にあり、東にある A-324 はやや小ぶりである。意図的なものか判断が難しい。
- 5) この階段状遺構は均質な粘土をつき固めて段を作り、表面を 1～2cm 程度の石膏プラスターでコーティングして仕上げている。第 14 層で 4 回、第 13 層で 2 回の改築が行われた。
- 6) これより下層は発掘区を縮小したため、第 10 層の西側建物は泥壁を確認しただけで内部は調査していない。
- 7) 南壁と東壁にも基礎石列が施工されていたかもしれないが、発掘区の範囲外であったため、確認できなかった。
- 8) 発掘を行った時点では、同時に存在した石膏面がどれとどれであったのか判断できなかった。図では、西、中央、東部分で最初の石膏面を示している。おそらく中央部分が最初に設置され、ついでその東側に 20cm ほど高い位置に東側の面が施工されたのだろう。中央部分の西辺、東部分の北辺に沿って白色容器の破片を幅約 10cm の帯状に配していた。おそらく泥壁か敷居の基礎であったのだろう。最後に中央、東の石膏面を取り囲むよ

うに、西側の石膏面が中央部の石膏面より10cmほど高い位置に設置されたようだ。当初は西と東がほぼ同じ高さにあり、中央部は一段低くなっていたと筆者らは推察している。

引用文献

- Cauvin, J. 2000 *The Birth of the Gods and the Origins of Agriculture*. Cambridge, Cambridge University Press. (1994 *Naissance des divinités, naissance de l'agriculture: La révolution des symboles au Néolithique*. Paris, CNRS. Translated from the French by T. Watkins)
- Cocqueugniot, E. 2000 Dja'de (Syrie): Un village à la veüe de la domestication (second moitié du IXème millénaire av. J.-C.). In J. Guilaine (ed.), *Premiers paysans du monde: Naissance des agricultures*, 61-80. Paris, Edition Errance.
- Ellis, R. 1968 *Foundation Deposits in Ancient Mesopotamia*. New Haven and London, Yale University Press.
- Gebel, H.G.K. 2002 Walls, Loci of Forces. In Gebel et al. (eds.) 2002, 119-132.
- Gebel, H. G. K., B. D. Hermansen and C. H. Jensen (eds.) 2002 *Magic Practices and Ritual in the Near Eastern Neolithic*. Studies in Early Near Eastern Production, Subsistence, and Environment 8. Berlin, ex-orient.
- Goring-Morris, N. 2000 The Quick and the Dead: The Social Context of Aceramic Neolithic Mortuary Practices as Seen from Kfar Hahoreh. In Kuijt (ed.) 103-136.
- Herva, V.-P. 2005 The Life of Buildings: Minoan Building Deposits in an Ecological Perspective. *Oxford Journal of Archaeology* 24/3: 215-227.
- Hodder, I and C. Cessford 2004 Daily Practice and Memory at Çatalhöyük. *American Antiquity* 69/1: 17-40.
- Kuijt, I. 2000 Keeping the Peace: Ritual, Skull Caching, and Community Integration in the Levantine Neolithic. In Kuijt (ed.) 137-164.
- Kuijt, I. (ed.) 2000 *Life in Neolithic Farming Communities: Social Organization, Identity, and Differentiation*. New York, Kluwer Academic / Plenum Publishers.
- Mellaart, J. 1967 *Çatal Hüyük: A Neolithic Town in Anatolia*. London, Thames and Hudson.
- Moore, A.M.T. 2000 The Excavation of Abu Hureyra 2. In A. M. T. Moore, G. C. Hillman and A. J. Legge (eds.), *Village on the Euphrates*, pp. 189-259. Oxford, Oxford University Press.
- Nishiaki, Y. 2002 The PPN/PN Settlement of Tell Seker al-Aheimar, the Upper Khabur, Syria: the 2001 Season. *Neo-Lithics* 2/01: 8-10.
- Nishiaki, Y. and M. Le Mière 2005 The Oldest Pottery Neolithic of Upper Mesopotamia: New Evidence from Tell Seker al-Aheimar, the Upper Khabur, Northeast Syria. *Paléorient* 31/2: 55-68.
- Nishiaki, Y. and M. Le Mière (in press) Stratigraphic Contexts of the Early Pottery Neolithic at Tell Seker al-Aheimar, the Upper Khabur, Northeast Syria. In H. Kuehne (ed.), *Proceedings of the 4th International Congress of the Archaeology of the Ancient Near East*. Berlin, Berlin Free University.
- Schmidt, K. 2005 "Ritual Centers" and the Neolithisation of Upper Mesopotamia. *Neo-Lithics* 2/05: 13-21.
- Stordeur, D. and F. Abbes 2002 Du PPNA au PPNB, mise en lumière d'une phase de transition à Jerf el-Ahmar (Syrie). *Bulletin de la Société Préhistorique Française* 99/3: 536-595.
- Tsuneki, A. 2002 A Neolithic Foundation Deposit at Tell 'Ain el-Kerkh. In Gebel et al. (eds.) 2002, 133-143.
- Verhoeven, M. 2002a Transformations of Society: The Changing Role of Ritual and Symbolism in the PPNB and the PN in the Levant, Syria and South-east Anatolia. *Paléorient* 28/1: 55-68.
- Verhoeven, M. 2002b Ritual and Ideology in the Pre-Pottery Neolithic B of the Levant and Southeast Anatolia. *Cambridge Archaeological Journal* 12/2: 233-258.
- Wilson, B. 1999 Displayed or Concealed?: Cross Cultural Evidence for Symbolic and Ritual Activity Depositing Iron Age Animal Bones. *Oxford Journal of Archaeology* 18/3: 297-305.
- Smith, P. 1972 Ganj Dareh Tepe. *Iran* 10: 165-168.
- 西秋良宏 2007 「北メソポタミア農耕村落の起源—テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡の第7次調査(2006年)—」『考古学が語る古代オリエント』30-35、日本西アジア考古学会。

須藤寛史

岡山市立オリエント美術館

Hiroshi SUDO

Okayama Orient Museum

西秋良宏

東京大学総合研究博物館

Yoshihiro NISHIAKI

The University Museum, The University of Tokyo